

前夜に灯る

桑名かおり

頼りない蝋燭の火が暗闇を照らしていた。

部屋にはびこる異様な寒さが肌に刺さる。しかしそんな寒さなど気にも留めず、奥へゆつくりと足を進める。

うつすらと広がる光がヨミの頬に触れた。何か愉しいことがあったのか、口角が僅かに上がっている。しかし闇の奥を捉えようと、僅かに眉間に皺を寄せた。

「随分と退屈そうじゃな、冥王」

闇は何も答えない。

ヨミはそれを気にはせず、懐から羊皮紙を取り出した。それを闇に向かって放り投げる。羊皮紙は闇に吸い込まれるように消えていった。

「知らせじゃ。フレイヤの軍勢がこちらに攻め込んでくるぞ。城近くの兵共が既にいくらか殺られておる」

羊皮紙を見た闇が僅かに揺れる。その揺れは徐々に大きくなり、低い笑い声が部屋の中に響き渡った。

その様子に、ヨミは愉快そうな笑みを浮かべる。

「愉しくなってきたのう」

アルフレッド達は途中のキャンプ地で陣を整え直していた。皆どこか硬い表情をしている。ピリッと肌に刺さるような空気が張りつめていた。

「決戦は明日だ！」

決戦に臨む战士们の前に、硬い表情のアルフレッドが高々と声を上げる。

「敵は冥王。奴との戦闘は今までのようにはいかないだろう。だが恐れることはない。俺たちはここまで戦って来たんだ。世界の平和は、もうすぐだ」

今まで戦ってきた仲間たちは、その言葉に静かに息を呑んだ。

この決戦に勝利すれば世界は再び平和になる。しかし負ければ、闇は消えぬまま光が絶える。全てが決することへの不安と恐怖が背を刺すように襲ってくる。

より一層緊張感の増した战士们に、アルフレッドは笑顔を作った。

「大丈夫だ、俺達は一人じゃない」

優しく、力強く。

その姿に战士们たちの表情から僅かに緊張が解れていった。一人が拳を空高く突き出し、

その決意を表すように太く吠えた。やがて戦士たちは次々と拳を空に向けて突き出し、自分もそうだと叫びわんばかりに強く吠えた。

キャンプ地に雄叫びが響き渡る。恐怖はあれど、皆決意は固まっていた。そんな彼らを、アルフレッドは硬い表情のまま見つめていた。

ひとまず解散し、各々明日に備えることになった。辺りはもう日も傾き始め、空は橙色に染まってきている。

夜に備えたき火を炊き、その側でアルフレッドは一人外で武器の整備をしていた。

(決戦は明日。これで、ようやく終わるんだ……)

刃に付いた汚れを綿で丁寧に取っていきながら、心の中は不安で覆われていた。皆を前にああ言っただけはみたものの、誰よりもアルフレッドが不安を抱いていた。

失敗をすれば、負けてしまえば、世界から闇は拭えない。

ここまでただ一心に己の使命を追いかけ、戦いを繰り返していた。それ故に、一抹の不安がその身を襲った。

(誰も、死なせはしない。俺が……)

ザリッ――。

砂を踏む音がし、バツとそちらへ振り向く。しかしそこに居たのはセラだった。

「なんだ、サラか……」

「なんだって何よ」

むつと頬を膨らませながら、アルフレッドの隣に腰掛ける。たき火に手をかざして暖を取りながら、サラはそつとアルフレッドの顔を盗み見た。

「怖い顔してる」

「え？」

「ほら」

ゆらゆらと揺れるたき火の明かりが、アルフレッドの顔を照らす。その表情は不安に染まっていた。そんなアルフレッドにサラは優しく微笑みかける。しかしアルフレッドは顔を逸らした。

「心配ないさ。ここまで頑張ってたんだ。それに、俺は一人ではないからな」

たき火を睨むような、鋭い眼光だった。その口から放たれる言葉は、まるで自分に言い聞かせているようだった。

「そりゃあ、俺一人で冥王と戦うとなれば尻尾巻いて逃げていたさ。例えそれが使命でも、戦おうなんて思えなかった。けれどサラやみんなが居て、一緒に戦って笑いあって、そうやってる内に……」

アルフレッドの口が止まる。骨が軋むほど強く拳を握りながら、震えるように俯いた。

そつと目を伏せ、サラは少しだけ大きく息を吸い込む。

「私もね、本当は怖いんだ」

パチパチと炎が弾けるのを見つめながら、サラは話だす。その瞼の裏に、仲間たちを思い浮かべながら。

「明日で全部終わってしまうんじゃないかって。明後日も、来年も、もう来ないんじゃないかって」

ここまで一緒に生きてきたからこそ、死への恐怖は増していく。戦い続ける以上、怪我や死は免れることはできない。現にここまで来たのは何人かの犠牲があつて成し遂げられている。

アルフレッドも同じだった。

今隣で笑い合っている仲間が、明日は冷たくなっているかもしれない。味わってきた死の感覚に手が震えた。

「でも、大丈夫だよ」

サラはアルフレッドを真っ直ぐに見つめた。

その目は不安に揺れながら、穏やかに微笑んでいた。

「根拠はないけど、大丈夫。私たちならきつと勝てるよ」

誰も死なせない。

世界の平和よりもそれを願ってしまうのは、英雄として許されるのだろうか。

ふっと、辺りが一瞬にして暗くなる。

「——ッ!!」

傍に置いていた剣を手に取り構える。足元で揺れていた炎は、不自然に消えた。

頬を切るような強い風と共に、二人の目の前に影が現れる。暗闇に慣れ切っていない目ではその顔を捉えることはできないが、アルフレッドはその影に向けて剣を向けた。

「早まるな、儂じゃ」

聞きなれた声に剣を構える手が緩む。闇に少しづつ慣れてきた目が、ようやく彼女の姿を捉えた。

「ヨミ……か?」

「ようやくか。全く、人間とは不憫な生物じゃな」

ヨミは胸の前で腕を組み、呆れたように溜息を吐く。小柄でありながら、その姿は様になっている。

アルフレッドは構えていた剣をしまい、肩の力を抜く。

「何をしに来たんだ? ——まさか!」

「安心せい、早々に潰しに来た訳ではない」

今潰してもつまらぬからな、と含みを帯びた笑みを浮かべる。その表情にアルフレッドとサラは身体を僅かに強張らせる。

それに気が付いたヨミは愉快そうに笑いだす。

「何を力んでおるか。儂は確かに冥王についているが、かといってうぬ等に刃を向けるこ

とはせぬ。それは前にも言ったであろう」

そう笑うヨミに対し、アルフレッドたちの表情は依然硬い。剣こそ構えてはいないものの、警戒の念は抱いている。

「それでヨミ、お前は何をしに来たんだ？」

なるべく穏やかにと気を付けたものの、アルフレッドの声は重かった。

「やはりな、思った通りじゃ」

一向に警戒を解かないアルフレッド達に、ヨミは呆れたように溜息を吐いた。

「そんな調子では先が思いやられるわ」

ヨミは組んでいた腕を下ろし、アルフレッドを真っ直ぐに見やる。闇夜に光るその眼光に、おもわず息を呑む。

細く白い腕が笏を握り、それを真っ直ぐにアルフレッドに向ける。

瞬間、その笏を軸に闇よりも暗い何か渦を巻くように現れ、アルフレッドに襲いかかった。

「——ッ！」

「危ない！」

アルフレッドは下ろしていた剣を構えなおし、その闇を受け止める。しかしそれだけでは抑えきれず、アルフレッドの足が後方へと押されていく。地面を削りながら足に力を籠め踏ん張る。

「このっ！」

アルフレッドのすぐ横を通り、サラの魔法が闇を振り払った。

息を切らしながら体制を整え、アルフレッドとサラはヨミを睨み付ける。先程とは違う、警戒と敵意を孕んだ目だ。

その眼を見て、ヨミは口角を上げた。

「そうじゃ、その目じゃ。死を恐れ生に縋り付く。そのためならば剣を向けることも辞さない」

いやらしく笑いながら、ヨミは笏を下ろした。そしてそのまま背を向ける。それでも、アルフレッドたちは構えを崩さない。

「ククク……、楽しみにしておるぞ」

そう言い残すと、ヨミはその体に闇を纏い消えていった。

ヨミの姿が見えなくなると、アルフレッドはようやくやく剣を下ろした。緊張していたせいか、体の節々がギシギシと痛む。

一人を前にこれだけ体が強張っている。攻撃を受け止めるだけで、こんなにも体が軋む。敵は彼女だけではない。城に辿り着くまでにも、辿り着いてからでも、五万と居るのだ。

「アルフレッド、今日はもう休もう？」

優しく声をかけるサラも、その表情には疲れと恐怖が出ていた。

あの時、サラの補助がなければ押し負けていた。自分一人では、あの場で死んでいたか

もしれない。

一人では、勝てない――。

「ああ、そうだな」

サラの後に付いてテントに向かう。ヨミが消えたと同時に空はいつも通りの暗さになっていた。見渡し限りの星々がキラキラと輝いている。

(必ず、生きて帰ろう)

星空を見上げながら、アルフレッドは誓った。